

令和7年度 泉大津市立図書館協議会

## ■第2回会議の議事概要

日 時：令和7年11月3日（月・祝）午後6時00分～午後7時45分

場 所：泉大津市立図書館オープンセミナースペース

出席：嶋田会長、阿児委員、岡本委員、澤谷委員、高島委員、高橋委員、  
谷合委員

公開の有無：公開

### 議 事

- （１）図書館評価について
- （２）図書館の観光情報発信について

### 議事

- （１）図書館評価について

嶋田議長：本年度２回目の図書館協議会ということで、議案の一つ目、泉大津市立図書館、図書館評価基準の見直しについて、事務局よりご説明をお願いいたします。

事務局：毎年、図書館年報を、皆さんに評価をいただいておりますが、前回の協議会の時に、ABC 評価について見直す方がいいのではないかというご意見を頂戴いたしました。委員の皆様にはお手元にお配りしております資料をご覧ください。傍聴の方は、画面をご覧ください。2021 年 9 月に開館しまして、年度ごとに目標とその実績を 3 年ごとに作成しております。2023 年度までは開館準備時に設定した数字でございます。A 評価が目標の 130%以上。B 評価が 70%から 129%まで、C 評価が 69%以下となっておりますが、昨年に関しましても、この数字でいくと A 評価は一つだけで、あとは B 評価、C 評価となっておりますので、見直しが必要ではないかのご意見をいただいたところでございます。この数字の部分について、皆様のご意見を頂戴できればと思います。よろしくお願いいたします。

嶋田議長：この ABC のそれぞれの達成度のパーセンテージの刻みが、かなりレベルが高いのではないかという議論が前回ございました。今回、それを踏まえて、資料をお出しいただいた上で、改めてこの達成のこの経緯なども、経過推移なども見ながら、皆さんからご意見いただければと思います。

阿児委員：この ABC の区分と数値は、まず泉大津市共通のものなのか、それとも別の典拠があって設定されたものかを改めて教えてください。

事務局：泉大津の共通のものではなく、私が以前勤務しておりました図書館の評価の数字をそのまま持ってきております。

阿児委員：やはり B の幅がかなり大きいのではないかと、項目それぞれに対して一律の ABC というのは項目の性格も違いますので、難しく一律に評価できないのではないかと感じました。さらに項目ごとのまとまりや関連性があると思います。ひとつひとつの項目で ABC となっていますが、合わせて評価すべきものもあるのではないかと感じております。例えば、蔵書や入館者数が増加しても、施設の大きさなどもあり、ある程度頭打ちになると思います。そうすると、蔵書の回転率というのが実は落ちてくるのではないかと、実利用率は、一人当たりに対して蔵書が増えていくのであれば、一人当たりの冊数というのは、全体に対して減るというのは当たり前のことなので、その関連性を考慮して行く時期になってきているのではないかと感じたところです。わたくしは博物館の所属ですので、図書館ならではの項目の関連性というのは、委員の皆様の見解をお伺いできればと思います、まずはご質問と事実確認をいたしました。

嶋田議長：まず阿児委員からのご案内、ご指摘に対して、委員の皆様いかがでしょうか。河瀬館長からもご説明や補足等あればお願いしたいと思います。

岡本委員：この基準に関して調べたところ、泉大津市の総合計画に関する政策評価で ABCD 評価をしています。基本的にはこういったものに準拠するのがいいと思っています。現在の ABC 評価はかなりレベルが高く、B の幅が大きすぎるので、B がついた時に肯定的に評価していいのか、否定的もしくはちょっと頑張らしようという扱いなのかが明確ではないというのは課題だと思っています。総合評価の数学評価に関しては、A が目標以上、B が順調、C が概ね順調、D が要改善となっていて、分かりやすく、B までできていれば、市民のニーズに対して充分応えられている。C に関して言うところの先少し頑張らしようという扱いではないかと思っています。こういったものに準拠するのがやっぱり良いのではないかと思います。阿児委員が言われたところは、私も重要だと思っています、図書館は比較的ここに該当しやすいと思うのですが、蔵書がある程度充足してきた時に、どうしても頭打ちになる傾向があると思います。ここに関しては恣意的ではない形で、ただし、開館時点で目標としていた数値目標に対して、到達してきたことによって成長が鈍化するという評価はやっぱり一点入れた方が良くと思っています。今回はそういう項目入っていませんが、10 年以上前に都立図書館の協議会委員をした時、都立図書館は Web ページの閲覧回数評価でページビューを評価しようとしていました。しかし、ページビューは Web サイトの作り方が悪ければいくらでも上がるので、これが良くないのではないかと、これが右肩上がりになり続けるという発想が果たして妥当かが分からない。いいサイトになることによって、当然低減していくものでもあることを申し上げました。今回は、数字評価を入れるにしても、基本的に右肩上がりでいけるものと、一定程度頭打ちになってしかるべきものと、区分するような目標の設定の仕方をした方が良くと思っています。

嶋田議長：この評価の枠組みについては、市の総合計画における 4 段階の評価の基準というものに準拠すればよいのではないかとということに加えて、目標設定の数値については鈍化する傾向、必ずしも政策的な成長の評価に当たらないものについては妥当な数字の置き方を、というお話でした。レファレンス件数や貸出数以外の参照、例えば本を棚から取って何か参考にするなど、本がどれぐらい役に立っているかという時に、棚から動いたということをうまく評価できないかということをお考えです。ご存知の方も多いと思いますが、札幌市図書館は、棚

から抜いた本を利用者に本棚に戻してもらうのではなく、返本台を置いておいて、そこに IC チップを読み取ってくるアンテナがあって、本がどれくらい棚から取られたのか、きちんと数字をつかんでいらっしゃいます。泉大津市立図書館も IC チップを導入されているので、基本的にはそれをやろうと思えばやれるのではないかと、泉大津市立図書館の棚作りなどがもっと本質的に評価されるためには、現在の評価項目では足りない、もったいないような気がします。棚から動いた本の評価ということも視野に入れてはどうかと感じています。

谷合委員：皆さんおっしゃっていることの繰り返しになりますが、ABC はもう少し細かく、項目ごとに変えた方がいいと思います。登録率はすでに 36.6%、あと 3 年ほどで 100%になるのではないのでしょうか。もうこれ以上爆発的に伸びるわけがないことは経験上わかるので、A A など細かくしていくこと、B がマイナスからプラスまでであるのはおかしいので見直すべきだと思います。またレファレンスの件数は、ものすごく多いのではないかと思います。今の時代は、AI が何でも答えてしまいます。そのような時代にあって、本当は激減してもおかしくないのにすごく頑張っているなと思いました。先ほど、棚から動かされた本を知る方法について発言がありましたが、児童書コーナーでは立ち読みをしている子供がたくさんいて、棚の前で見ているので恐らくそのまま棚に戻すのではないかと思います。棚がちょうどいい高さになっているのでちょっと微笑ましいなと思いました。

高島委員：新たに評価指標を作り替えるというお話でしたが、今までの評価指標が図書館を評価する上で重要なものであったとしても、せっかくの機会なので、思い切ってガラッと変えてみるのも良いのではないかと感じました。また、大きな枠組みの中で項目が分類されている方が、図書館の特性や役割が直感的に伝わりやすくなるように思います。前回の協議会でも議論があったと思いますが、泉大津市立図書館の特徴として、本の貸出数よりもイベントや講座などの実施に力を入れている面があると感じており、そうした質的な取り組みも評価に含められると良いのではないかと思います。もちろん、数値化や評価が難しいことは承

知していますが、今回のような節目のタイミングであれば、今後の課題としてでもよいので、そういった方向性を意識した指標にできればと思います。

嶋田議長：前回、図書館協議会の委員の皆さんから質的な評価ということで物語の提案があり、実際に委員の皆さんにご協力いただいて、教育長にもコメントをいただき、図書館ホームページに公開されました。協議会の委員として一つの成果だったと思います。もう少し全員で検討するのであれば思い切った再検討もあっていいのではないかと、例えば質的という時に、高島委員からの話にありましたが、ビジネス支援の取り組みの多様性、それが泉大津市のどのような産業に対してコミットしているのか、新たな何か泉大津市における産業の振興、個人事業者の方を含めて実際の開業につながったような事例など何か視点が無いのかと感じたところです。もちろんビジネス支援だけではなく、他に多様なレファレンスケースもあると思います。児童サービス、教育、福祉、多様な部分があると思うので、評価という時に、アウトプットの段階で、こういう方のこんなストーリーでこんなふうに図書館の情報が役立ったというようなこと、それが泉大津市立図書館の報告として出て、それに対して協議会委員が質的な評価をするという見方もあって良いのではないかと感じました。

澤谷委員：アウトプットという部分では、本当はいいことも市民は言いたいものだけれども、ご意見ご要望となると意見を言わなくてはいけないという感じになると思います。以前、勤務していた図書館では、100周年の記念とか、何周年の記念という時に、図書館についての思い出を市民の方から書いていただいたことがありました。普段聞けないようなお話や図書館にまつわる思い出などを書いてくださっていて、こんな使い方をしてくださっているのだとか、こういうことがあって読書や本に触れるようなことをずっと続けているのだということが見えてきたので、実際に使っている人たちの評価になるかと思いましたので、ご紹介をさせていただこうと思います。先ほどの数字の評価の件に戻りますが、単年度で見るとよりも本当は5年ごととか、時期修正を行えばいいと思います。それから泉大津市の政策目標では要改善という項目がありますが、それをやめるということではなく、どうやったらこの政策が改善するかということを踏まえた上での要改

善に持っていったらよいと思います。図書館は、1回何かをやったからと言って、すぐに数字に結びついたり、市民の方がすぐに本を読むことになるわけではないので、積み重ねをしていくためのやり方としての変化に繋がる方がよいと思いました。

高橋委員：学校でもよく評価の話をしています。今までの定量的な評価から、これからは定性的な評価に変わっていかなければならないという議論をしょっちゅう行っています。子供たちに、どんなふうに評価してほしいのかということを聞いたことがあります。通知表だけの数字の評価なんて見て一瞬で終わるので、単元ごとに言葉で評価してほしい、お友達から評価してほしい、保護者からも評価してほしい、外部の人にたまに見ていただいて、そこからの声も欲しいとか、今までの評価とはもう変わっていかなければならない時であると思います。実際、今、変えている途中です。定性的な評価は、すごく励みになったり、モチベーションの維持につながったりします。図書館の場合、職員もたくさんいて、職員のモチベーションが上がっていくような、働いていてよかったなという、その空気が図書館自体を作っていくのではないかと考えて、単に数字で現れるとわからないところも大事にしてほしいなという気がします。

嶋田議長：まさに評価することの本質的なところを教えてくださいました。もちろん、市民の皆さんに対するアカウンタビリティということもあるわけですが、やはり評価のための評価ではなく、改善につながる、さらに職員が頑張ろうというモチベーションが上がるようなところでは本当に大事ななと思いました。そういったところで言うと、先ほど澤谷委員からのお話しにあった、市民のための市民の図書館を市民が評価するという、その住民自治という観点からも非常に意味のあることだなと感じながら伺っておりました。

阿児委員：私も博物館でこういう評価は数字で言われるのですが、嶋田委員からアウトプットという活動の数字が出てきたと紹介されましたが、やはり皆さんがおっしゃっているように、今求められているのは質的なところ、さらにアウトカムと言われるところです。そのアウトプットの成果に対して、その成果によって何が変化したのか。どういうふうな影響が及ぼされたのか。子供さんたちだった

ら、それによって何か勉強への意図が変わった、部活への取り組み方が変わった、そういう変化を言葉で欲しい、そういうところを見てほしいということだと思います。成績が上がってなくても、その姿勢が変わったということが大事であって、我々がストーリーで書いたというのは、まさにその変化の部分、影響がこういうふうに見えてきているというのを描いたと思っております、それがアウトカムというところかなと思いました。アウトカムがすごく今大事にされているというところになると、アウトプットとして出る数値が本来何を目標として立てられた項目だったのかというところを共有しないといけないのではないのでしょうか。これが達成されたアウトプットでA評価B評価されたことによって、どのような変化を及ぼしているのかというのがとても大事なのではないかと思います。そこを書くことが難しいと思うのですが、それこそ総合評価になるのではないかと感じています。これから考えていく上では、それぞれの項目が何を目標として立てられたアウトプット数値なのかというのを合わせて、測ったことによって何が変わってほしいと思っているのかという関連性を知りたいと思って最初に質問をしました。

嶋田議長：今、兵庫県の丹波市の基本計画策定をさせてもらっているのですが、その中に評価をどんなふうにするかという議論もありました。町の方々がご用意されたのがまさにこのアウトプットです。まさに阿児委員がおっしゃったレファレンスの件数が何年後かに増えているという目指すべき姿がアウトプットで描かれていたので、増えたことによって、どんなふうになっているかということを書きましようとして提案しました。相談したいと思う人が増えたというように変わってきているのです。増えたというところが定量的なのですが、相談したいと思うようになったということですね。そうやって考えると、先ほど、住民による、住民の評価といった時に、客観的に見えている姿をご自分の感想としてこんな風になって、泉大津市としてすごく良くなったっていうのがあると思うのですが、ご自分の変化についても語ってもらうようなことがあり得るのかなと感じました。泉大津市立図書館を使ったらどうなったか。その辺は私的領域に入るお話なのであれば協力していただくことも慎重にしなければいけないと思います。住民自身の観点で評価に協力していただくということと、阿児委員がおっしゃったような、この目標を達成したら市民がどう変化したかということを専門的な領域

から意見を述べるのではなく、市民の方々自身にワークショップで考えていただくというのはいかがかと思いました。

岡本委員：まず嶋田委員の言われた点で言うと、クローズアップ現代で取材された佐川町の話で感心したのが、町民が議会に関心持つようになってきたというのはなかなかすごいなと思いました。行政サイドが求めるのは非常に難しく、やはりそれは当事者から声を出していただくしかないと思います。ただし、ソーシャルリスニングという手法が最近増えてきますけれど、市民の方からの声をどう広く集めるかっていうのは少し考えた方がよいとは思いますが、いずれにせよ、21年度からこの数字が実績として出ていて、今年度が終わると5か年積み上げることになるので、とにかくこれをもって立ち上げの初期の5年は終わったと捉えて次のものを作る。その次のものを作る中で、今言ったような市民お一人お一人の自覚としてどう変化が起きたかということを入れていくような改定を進めるのが私は望ましいと思っています。その改定をする際に私は2つ提案をしたいのですが、一つは、多少角は立ちますが、府内全自治体の図書館の平均値との比較をもっと積極的にしていった方がいいと思います。大阪府の場合、図書館がほぼ設置されている状況です。図書館設置率が高いので、平均値を出せる。平均に対してどれぐらい数字が良いのかということを中心にきちんとしていくことが評価しやすくする点かなと思います。同程度の泉南エリアの自治体と比べてどれぐらいなのか、泉南エリアの平均と比べてあるいは全府下で比べてというような評価を出した方がいいと思っています。あともう一つ評価をすべきポイントを新たに考えていいのではないかと思います。例えば先ほども視察の方がいらっしゃっていましたが、泉大津市立図書館はやはり視察回数が多いというのは、かなり大きな特徴だと思います。開館時には視察件数を評価に入れようがないと思います。しかし、実際に来ていること、首長さんもかなり熱心に誘致されていること、交通の便の良さなど様々な要因はあると思いますが、5年経ってもこれだけ視察に来ているのは結構すごいなと思います。だから評価にしても良いのかなと思います。もう何年前ですが、有名な伊万里市の図書館に伺った時に、最近ちゃんと視察件数を数えるようにしたとおっしゃってました。やはり視察は行政において重大な意味を持っているので、それだけ注目すべきポイントになっているということでした。これは、あくまで提示すぎないので、泉大津だったら何かということとはよく考える必要があると思います。新しく足すべき評価した点は何なの



かっていうのを議論するのと同時に、この機会にやめてもいいものは何なのかも出した方が良くと思っています。そういうことも含めて、5 力年のまとめというのをする方向に進んでいくのが良いのではないかと思います。

事務局：いろいろなご意見をありがとうございます。前回、ストーリーによる質的評価を出していただいて、一番喜んでいるのは図書館スタッフです。やはり中にいるとどう評価されているかわからないし、図書館員の経験がないスタッフが多いので、どれが普通かっていうところが今までわかっていなかったのが、委員の先生方に言葉でいただくと、私たちがやっているのはこういうことかというのが分かったというスタッフの声がありました。もう一つは、ストーリーによる質的評価の話を聞きたいという視察が最近増えているということです。開館してすぐは新しく図書館を作る自治体の方というのがすごく多かったのですが、最近は、子供の居場所についてと、このストーリーによる質的評価というこの2つのポイントで視察に来られる方がとても増えています。ちなみに今月は今のところ11 団体の視察が入っています。これもスタッフに言わせると、これが普通だと思っていたようですが、私もいくつか図書館の開館に携わらせていただきましたけど、こんなに視察に来てくださる図書館はないので、それだけ泉大津市立図書館を見ていただいているというのを感じているところです。

嶋田議長：視察が多いというのは、泉大津市という自治体の一つのブランディングに貢献していると思いますし、視察に来てくださった方からの感想が皆さんにフィードバックされることも多いだろうと思います。これを客観的に評価として捉えるという時には、単純に市民としてはシビックプライドというか、私たちの町の図書館でこんなによその図書館から勉強に来たいと思うような図書館なのだとということで喜ばしいことです。そうすると今まであまり図書館には行かなかったけれど、そんなに評判ならちょっと行ってみようかという市民の方も来るかもしれません。この視察件数というのは、なぜ評価をするのかという理屈はちゃんと必要だと思いますけれど、岡本委員がおっしゃったように評価軸に入れてもいいのかなと思いました。論点から外れるかもしれませんが、例えば自治体のまちづくり意識調査を企画課がやっていらっしゃると思います。それに図書館についての質問項目があるかを伺いたいです。もし、ないとすると新しく加えていただ

くことが可能なのか、その時に市民だけれども図書館を使ってない方が泉大津市立図書館をどういうふうを意識されているか、こういう図書館になっているということちゃんと分かっていますよとか、それについては納税者として喜ばしいとか、私が図書館を使うのはこういう理由です、使ってないけれども、これから税金がこういう風に使われることについては望ましく思うなど、そういう方への質問もありますか。

事務局：質問はありません。今、学校のアンケートの中に図書館のことを入れていただきたいという働きかけをしています。

嶋田議長：私も自治体職員の時に、まちづくり意識調査に図書館の質問がなかったので、総務課の方にお願ひしました。質問は、図書館を使ってない理由と、どのような図書館だったら使いたいと思うか。これは使ってないことの裏返しになるケースもありますけれど、いくつか選択肢を戦略的に書いて自由記入欄ももちろん作りました。運営のヒントになるような気がしまして、申し上げた次第でございます。

岡本委員：補足的に言うと、先ほどのランキングの話ですが、新公民連携最前線というまちづくり関係では必ず参照されているメディアがあり、毎年、全国自治体視察件数ランキングというデータを出しています。実は泉大津市立図書館が入っているんです。13位に入っています。年間33回ってということで、かなり高い。だから、文教分野、社会教育分野だけではないところで参照されているものとかは、積極的に評価に加えていって良いと思うんです。おそらく泉大津市立図書館の視察が途切れない理由の一つはここだと思うんです。ここに来ている方って、必ずしも教育委員会の方ではないですよ。議会の方もかなり来られている。政策運営の方が来られているのは、おそらくこれが効いていると思うんです。だから、こういうものにどれぐらい入っているかというのも、少し目を広げてみていった方がいいかなと思います。

嶋田議長：様々な評価指標について、質的なものも含めて自由に見解をさせていただいていますけれども、いかがでしょうか。

阿児委員：今、岡本委員がおっしゃっていたんですけれども、視察はどうやって知っていらっしゃるのでしょうか。話せる範囲で、もし共有いただけるのであれば教えていただきたい。口コミなのか、そういうランキングを拝見したのか、どこで皆さんがシープラに来てみよう、視察してみようっていうのを決められた、または調べて知ったかを教えていただけると嬉しいです。

事務局：多分口コミというか、新しい図書館だということで来ていただいている人が多いと思うんですけれども、2024年度の年報をご覧ください。明らかに図書館よりも行政の方とか企業の方が多いんですね。議員さんは視察先リストなどでお調べになるケースがあるようです。泉大津市立図書館は視察件数が多いので、それを見てきましたとおっしゃる方もありますし、別の地域の議員から聞いて来ましたという方も最近多いです。今月は、ほとんどが議会からの視察です。図書館からの視察は1件だったと思います。

谷合委員：韓国とか台湾からも来ていますね。

事務局：韓国は企業の方が来館されました。

嶋田議長：先を急ぐというわけではないのですけれども、岡本委員のご提案ですが、5年のこの量的な評価を一括りでまとめということにした後の、次のステップとしての評価を検討するという時に、質的評価ということと、この量的評価を指標としたときに、そこに光が当たって、どういうものが生み出されているのかっていうのを想像して、そういうシーンを質的評価の項目のひとつとして描いてみるということ。これは職員の皆さんで、運営当事者としてお考えになるということもあると思うのですけれども、例えば、我々委員がこんなようなアウトカムが考えられるのではないかと、委員の立場でご意見を言うということをやってみて

はいかがか。例えば3回目の協議会にいくつ出すとか、ちょっと大変だと思うのですが、皆さんの方で想定できるアウトカムを出し合ってみるというのはいかがでしょうか。それは協議会委員のやる仕事の範囲を超えている、あくまで行政当局の皆さんが出された意見に対して、我々は意見を言うということがいいのか、その辺も含めて何かご意見いただけるとありがたいと思います。

岡本委員：協議会としてどれぐらい、どういう形で動くかっていうのは結構決め方次第かなと思っていて、さっき言った都立図書館協議会は結構やっていました。分科会を作って、文章も自分たちで書くっていうのは結構前提になっていて、要するに分科会に当たるかどうかにもよるんですけど、分科会の担当になると、がっつり起案するところまでやりました。だから今回は、そのベースのデータを作るというか、下書きというか、素案というか、メモ書きぐらいであれば、協議会の中でせっかくこういう顔ぶれで特に集まっているので、まずはブレストしてみるというのは結構いいんじゃないかなと思っています。同時に並行して、この第2期。運営的に第2期みたいな時期に変わってくる次の5年間となってくるので、職員の皆さんにぜひそこに入っていただきたい。職員として、やはり今のお話をうかがっても、何を評価として見てほしいのか。ここはちゃんと見てほしいというのがあると思うんです。それを伺った上で、もちろん入れる入れないに関しては、最終的に教育委員会でのご判断になるかと思うんですけど、やっぱり利用者の皆さんという、エンドユーザーに対して一番向き合っている方々が、これ見ていないとモチベーションに結構影響するというものがあれば、それもしっかり伺いたいところだなと思います。

嶋田議長：私も大変賛同いたします。先ほど高橋委員から、学校の評価ということで、生徒さん自身にどんなところを見てもらいたいかということを率直にお聞きになったということで、私も冒頭、評価の内容について何かワークショップはありえないかということを少し発言したんですけど、泉大津市の「キミとよみドキ」ワークショップをして、率直な意見が出てきて、非常に面白い取り組みだったと思うんですけど、そのあたり、子供たちやよくいらっしゃっている方とか

も含めてですけど、館長としては、市民ワークショップをやるっていうようなことは可能性としてはどうでしょう。

事務局：すごくやってみたいです。やはりこれ(年報)はどっちかというところ、行政へのアピールや、同業の人に分かってもらうための数字であって、市民の方がこれを読むとおっしゃるとは思えないので、自分が住んでいるところの図書館がこういう評価かというのを市民の方にわかっていただきたいというのはすごくあります。先ほど、図書館の思い出っておっしゃっていただいたんですけど、まさにストーリーによる質的評価をしていただいた時に、使っている方からストーリーを書いていただいたら、私たちの足元をちゃんと見てくださっている、支えてくださっている方からの評価になるんじゃないかなと思いました。それこそカウンターに立っているスタッフが一番そういう声は拾っていますので、きちんと文字になっていくといいなという思いがあります。

嶋田議長：話を総合すると、泉大津市立図書館もみんなで認めあうというようなことになりそうですね。職員の皆さん、利用する市民の皆さん、そして協議会委員。そういうことがイメージとして浮かんでまいりました。ここまでの意見交換でいかがでしょうか。

澤谷委員：私、よく褒められて伸びるタイプだって言うんですけど、やっぱり褒めてもらおうと頑張ろうと思います。私自身は、市民の方から評価されるって図書館の人間としては結構怖いです。またいろいろなご意見をいただくんだらうなって怖い思いもある一方で、ある人に言われたのが人気税ですって言われて、いろんなご意見を言う人がいるのは、いろいろ使っていて、いいこともあるから、よりよくして欲しいから言いたいってことなので、それも含めた意見をいただけるといいのかなと思っています。

嶋田議長：重要なご指摘だと思います。

高島委員：この協議会で毎回いろいろなお話を伺うたびに、「ああ、この図書館は本当にすごいな」と感じています。泉大津市民の方々にとっては、こうした図書館の環境が日常の一部になっていて、図書館の魅力や強みが見えにくくなっているかもしれません。だからこそ、もっと市民に向けて「この図書館、実はすごいんですよ」と自信を持って発信してもよいのではないかと思います。館長さんの控えめなお人柄もあるのかもしれませんが、例えばストーリー評価など、実はとても魅力的な取り組みがあるのに、それがどれほど市民に届いているかという疑問があります。ホームページに掲載されていても、すべての市民がそれを見るとは限らないので、もっと積極的にアピールする工夫があっても良いと感じました。また、先ほどワークショップの話も出ましたが、市民の声を聞くだけでなく、館長さんの思いを伝える場としても、そうした場が活用されるとより双方向の関係が生まれるのではないかと思います。

嶋田議長：新たな枠組みの評価について様々な意見が出ております。ちょっと観点を変えますと、評価という時に、アウトプットアウトカムということもあるわけですが、労働環境というようなことですよね。谷合委員が目の前にいらっしゃるので、お聞きしたいんですけれども、例えば、行政施策の評価において、働く方々の状況について労働界では動きがあるのでしょうか。

谷合委員：今、非正規の司書がすごく増えているので、労働組合・自治労とかが調査していますし、組織化も徐々に進んでいるのですが、なかなか厳しいです。厳しいというのは組織するのも厳しい。非正規の人たちだけを組織していくっていうのも流動性が高くかなり厳しいので、活動はされてるけれども、なかなか全国にそれが知れ渡るわけでもない。いろんな自治体にとっては、そういう情報はあまり耳に入れてほしくないかもしれないっていうような情報でもある。ここはね、難しいところだなと本当は思っているんです。視察に来てる人たちがどこを見てるかというのがね、ここは指定管理館ではないじゃないですか。どこがたくさん視察に来られるのか、指定管理館ですか。

岡本委員：そんなことはないと思います。結構いろんなところに視察されるというのは耳にするところです。

谷合委員：視察に来られている方たちは、建物を見たり、雇用形態を見たり、予算をどういう風につけているとか、いろんなところを見ていらっしゃると思うのです。労働問題に特化したら、できるだけ安上がりにやりたいというのが、行政側の考え方だろうなと思うのですけれども、それでいいのかという問題は当然あるわけで、だけどステークホルダーは市民だから結局税金なのでという、その責めがいには常にありますよね。これは本当に難しいので、私はなんとも言い難いんですけど、でも長い目で見てほしい。だから首長さんが自分の任期4年だけうまくいけばいいと考えるのではなく、できたら百年後のことまで。せめて20年後ぐらいのことまでは考えてほしいです。今、小学生の子たちが成人した時のこと考えて、どこに貴重な税金使おうとか、図書館だったらどういうことを見ていくのとかいうことを細かく見てほしいなと思います。ちょっと余談になるんですけど、私さっきからレファレンス件数がすごく気になっています。具体的にレファレンスの中身はなんでしょう。最近、ググったらすぐにAIが何でも答えるのは良し悪しだなと思っています。図書館のレファレンスは、あまりに丁寧に親切に何でも答えると調べる楽しさを奪います。調べ方はやはり教えてもらわなければ、ゼロからは無理だから。こういうのはできますよとか、これを見たら分かるかもしれませんよというヒントを与えてもらったら、特に子供たちは調べる楽しさというのがわかったらすごく伸びていくと思うんです。ケースバイケースですけど、社会人は急いでいらっしゃいますよね。今すぐ答えがほしいとか、午後からの裁判のためにこの資料がいりますと言われたら必死になって探すことはあります。誰に対してどこまでどういうレファレンスするかそういう細かいところまで考えてレファレンスすればいいんです。今、レファ協を見てたんですけど、泉大津市立図書館には結構難しいレファレンスが来ているなと思って、だからちゃんと使える人は使うわけですよね。ググったんでは出てこないっていうのは分かっているわけだからというところも含めて、じっくり中身を見てほしいなと思いました。

嶋田議長：前回の協議会でも持続可能性ということがテーマになって、これはもちろん泉大津市だけではなくて、自治体全体がこのまま十数年後にちゃんと政策形成力も含めて自治体を発展的に運営できるのかと問われています。これは令和5年の総務省統計ですが、職員の非正規比率は、民間事業者38%よりも地方自治体40%と高くなっている。自治体の状況は非常に課題だなと思います。図書館というものが、目に見えているものだけ評価されて、その実いろいろなしわ寄せが職員の方々にいっているということがあると、それは自治体行政として評価できるのかという見方もある。図書館協議会として持続可能性という観点からは、行政運営の状況を少し気にしておきたいなと思ひましてあえて発言させていただきました。私の方から先ほど提案させていただいた、次回の協議会までに皆さんご無理のない範囲で、例えばこの量的評価の指標というものが達成されたときに市民の皆さんにどういうアウトカムがもたらされていると考えられるかという、今後の新しい評価の指標になるような構想やアイディアを出すということについていかがでしょうか。例えばレファレンス件数がこれだけの件数になったということは、市民にどのような変化が起こっていると考えられるか。その変化の起こり分、変化分というものをアウトカムの評価として、設けてみるというのはどうだろうという議論にも発展する可能性があります。そのようなご意見をいただけないかなということを考えた次第でございます。では、任意でお出しいただける方にはお出しいただけるぐらいの感じで、テーマということでお願いしてもよろしいでしょうか。ありがとうございます。次回の3回目の議案については、その他のところでどういう協議内容になるのかということをお聞かせいただければと思います。すぐにできるものではないので、どれぐらいの時期に新しい評価軸を作るのかというスケジュールも含めた目標設定がないと、なかなか議論もしにくいと思います。今日はこの評価基準の見直しについてということで、この3段階をもうちょっとどうにかしたらいいんじゃないかという、さらに具体的な話でしたね。そこから今日は質的なところに飛びましたので、館長とも相談しながら、今後の議論の進め方について委員の皆さんにお願いするということによろしいでしょうか。整理しますと、評価のABCというものについて、ちょっと荒いだろう厳しいだろうということもありました。4段階ぐらいが適切ではなかろうかと。目標を達成したのであれば、BないしAということでしょうか。岡本委員



からご指摘もありましたように、総合計画における評価軸は、A B C D評価ということですので、整合性も含めて図書館でお考えいただいて、事務局の方に改善案をお示しいただくと、そういうことでよろしいでしょうか。2つ目の議題です。図書館の観光情報発信について、事務局からのご説明をお願いいたします。

事務局：泉大津市立図書館が観光の情報発信を行って、泉大津市の観光の入り口になる取り組みを行っていききたいと、前回の協議会でお話をさせていただきました。この表(中長期の取り組み)を作成し、図書館が開館しました2021年には、ビジネス支援と学校図書館の支援というところを大きな軸として動いてきました。次の年は、議会図書室の支援と行政支援を動きに加えました。2023年には子供の読書活動推進計画、図書館協議会委員の皆様にもご協力いただきました「キミと、よみドキっ!」をつくるというところが大きな動き。そして郷土資料の整備が進んでいなかったのも、図書館としてはきちんとやっていきたいと重点の活動に上げました。2024年がデジタルアーカイブの利活用というところで、阿児委員、谷合委員にいろいろとご相談させていただいておりましたが、それをどう使っていくか、あるものをどう使っていくかというところ。シティプロモーション事業を市が重点的にやろうとしておりましたので、そこを情報でバックアップするのが図書館ではないかと思い、2024年は動いてまいりました。今年は、第5次総合計画に基づく取り組みをきちんと行っていくというところと、公立図書館と学校図書館を融合させようというのを目標として書いていました。泉大津市立図書館の特色として、博物館機能であるおりあみゅーがあって、観光情報や地域の産業の情報をきちんとここから発信できる。また、ここリソースで、今の泉大津を支える産業や企業の発信もできる。CO-ONがあって、そこで販売もしているっていうのは、通常の図書館にプラスアルファのすごい条件が揃っていると思っています。そこでもう少し観光の取り組みをやっていききたいと思うのですが、図書館と観光って先進事例があまりなく、委員の皆様でご存知のことがあったりとか、こういう取り組みがいいのではないかなというようなご意見を頂戴できればと思います。

阿児委員：今、飛騨市図書館のワークショップに呼んでいただいているんですけども、飛騨市の図書館って市役所に隣接していて、さらに駐車場が共同で使われているんですね。近くに博物館とか観光拠点があるんですけども、観光にいらっしゃる方々は、共同駐車場にまずバスが停まるんですよ。そこで観光が始まるんですね。では、市役所の観光コーナーに行くかと思ったら、そうではなくて、図書館の入り口に観光のチラシがあったり、郷土資料も調べられますし、飛騨市を知ることができるコーナーが図書館にある。これすごいなと思って。シープラの駅前だとすると、ではどこから歩き始めようという時に、まずシープラ拠点にすることも一つ可能だと思いますし、市役所の中に観光情報を取りに行くのはなかなか大変だったりする。その時、図書館がその一部を担えるのではないかとお話を聞いていて思いました。もうひとつ、これは飛騨市特有なんですけど、映画「君の名は」で観光地化したというのがあって、聖地巡礼じゃないんですけども、図書館の利用者っていうのは、本を借りる人たちだけじゃない。こちらでも見えているところなんですけども、やはり観光客の方も図書館利用があるっていうのが、飛騨市は見えたんですね。シープラでも見えているんだらうけども、図書館利用者のステークホルダーの一つである観光の方々っていうのをどう図書館利用するんだらうっていうのが今はないので、発信とか活用とかかなと思っていました。私、岸和田市出身なんですけど、祭りの時に岸和田市立図書館に行って、だんじりのことを調べようと思った人は一人もいないですね。場所もないですし、でもシープラは何かできるんじゃないかなと考えると、観光の出発点、泉大津を知ることの出発点、観光情報の拠点になるんじゃないかなっていうのは思っていました。まずアイディアの一つですが、私からは以上です。

岡本委員：今、阿児委員にお話しいただいたところに結構関わる話だと思うんですけど、まず泉大津市はそもそも博物館がないんですね。そこがまず大事なかなと思います。ミュージアムがない、でもデジタルアーカイブの取り組みとかを図書館でやっていることで事実上ミュージアムになっている。その役割をもっと強めていくのは、現実的なところかなと思います。正直、泉大津市が登録博物館に値するような施設を作れるか、まあ普通ないでしょう。ありえないと思います。そうなると、むしろ図書館がそこを一点に担っていくというのは決して悪いことではないし、正直、今そういう流れだと思います。新しい施設を一つ独立して作

るというよりは、図書館や公民館、博物館として、まあ、いわゆる文化的コモンズという概念が提案されていますけど、そうやって一か所に集約していくようなあり方があり、だからそういう認識を持って、まず取り組みを進めた方がいいかなと思っています。そうなる何が変わるかというと、ここは博物館法の対象となる施設という可能性がある。そういう施設だと認識をすると、観光の取り組みって一気に進めやすくなるわけです。改正博物館法においては、明確に観光に資するっていう目的が掲げられている。つい数日前、そういうシンポジウムをしたんですけど、学芸員の人たちの間では、ややそれに対して抵抗感があるようなんですが、私たちは海外に旅行に行った時に普通に博物館に行くし、普通に図書館に行きますよね。めちゃくちゃそこは観光スポットになります。韓国の国立博物館が年間来場者数 500 万人が達成したそうで、アジアで多分は初めてですね。世界のミュージアムに並ぶような状況になり、韓国の 13 ミュージアムの総数の観客というか。来場動員数で韓国プロ野球を超えそうな勢いになっている。それはやはり K-POP を成功させている韓国の文化政策の賜物ということを感じるんですが、同じようなことを泉大津市も考えて良いんじゃないですかね。ここは充分観光地になっている。だからそこにもっと観光情報を集約するというのは良いと思います。実際、私もちょっと今日自分の都合があって、観光情報を調べたんですけど、図書館においてはるるぶやマップルがあれだけ置かれてるってめちゃくちゃ貴重なんです。そこらの書店より明らかにあるんで、こういったところ、性格をより強めていくというのは、私はおすすめですね。こういったことをやっている図書館として言えば、恩納村文化情報センターが知られているところですけど、ただ、本土では全然まだないと思います。だからこそ、ここは手をいれられる、手を入れて、そこに力を入れれば、それはそれでまたこの泉大津市として評価を高められることに繋がっていくんじゃないでしょうか。

谷合委員：飛騨市の聖地巡礼の話がでたんですけど、ここもロケ地に誘致したらどうなんですかね。ご当地映画ってあんまり評判良くないんですけど、やってみるっていうのは一つ考えられないでしょうか。図書館映画って結構あるじゃないですか。天使がいる図書館とかね。あれは広陵町ですね、広陵町の図書館とか、すごいいい感じに写っていたし。シープラの場合は羊がいるといいですね、羊がいる図書館みたいな、ちょっと夢が膨らむような、ちょっと妄想に近い。(市

HP ロケにおいでやいずみおおつ)あながち妄想でもなかったね。こういうことをどんどんやったらいいと思うんですよね。図書館と、全市上げてやってみるとかっていうのも何かいいアイディア。地元の人に脚本書いてもらってとかね。映画が好きだから私は夢膨らむんです。ここに来てもらうっていう観光図書館ってということと、ここを拠点に世界中の観光情報も集めるっていうのと、両方あっていいんだろうなと思っているんです。震災前の南相馬市立図書館、観光情報をめちゃくちゃ集めていたんですよ。私、震災直後にボランティアに行った時に、全国から集めた観光情報のコーナーがあるのを見ました。とても充実してたんですけど、残念ながら震災があったので、南相馬市は、市の半分がもう避難地域になってしまったりということがあって、観光どころで無くなってたんですけど、こういう情報をずっと全部手に取れるっていうのはすごいなと思ったことがあるんです。ここに来てもらう、ここを拠点にする、その両方で考えてもらったらいいんじゃないかなと思います。

嶋田議長：例えば中学校で修学旅行に行くときにどのように訪問地を決めていらっしゃるんですか？もしかして図書館資料というのが役に立ってるのか、そのあたり教えていただいてよろしいでしょうか。

高橋委員：修学旅行については、3年に1回見直す内規があります。保護者の方と子供の意見を入れながら、数社の旅行会社にプレゼンをやってもらって決める方法をとっています。そのときに子供もちろん調べることもします。ちょっと話は変わるんですけどね。小津中学校ではプロジェクト学習を進めていて、今年は面白いプロジェクトが一つあって、泉大津のだんじりを研究するグループがあって、今年は360度カメラを屋根の上に乗っている人につけてもらって、市内18町のだんじりで撮影したんです。子供はもちろん乗れないので依頼してお願いして。その動機は何かというと、だんじりって岸和田を中心に有名になってきてるけども、泉大津はまだまだだんじり文化が激しいんですけど、あまり知られてないのを世の中の人に知ってもらいたいのと、屋根に登れるって本当に限られた人だけなんですね。女性やお年寄り、ちっちゃい子供は乗ることができない。だからこそ、だんじりから見た世界をいろんな人に体験してほしいということで、映

像を撮ってみたんです。ものすごく面白い映像ができて、僕らも見ただことない世界で、なおかつ 360 度なんですね。後ろにいる人も横で頑張ってる人も全部見ることができる。学校には映像カメラ自体も少ないし、VR のゴーグルもそんなに数がないんです。今回は、大阪府教育委員会と東京学芸大に協力していただいて、数十台集めて発表もできるようになりました。カメラとか VR のゴーグルがあるような施設があったらいいな、図書館なんかぴったりののになあと思いました。泉大津市教育支援センターにそれに近いものがあるんですが、教育に特化した施設なのでなかなか足を運んでもらえない。ここ(泉大津市立図書館)の方がいろんな人来てくれるんで、学校で作った映像とか、文化の紹介なんかを見れるようなになれば嬉しいと思います。

阿児委員：まさに知のサイクルに近いですね。学校で作成したものが図書館にあるとかいいですね。

谷合委員：この間終わった万博で、VR 使ったブースがいっぱいあって、もうめちゃくちゃ面白いんですよ。そんなに広い場所はいらない。椅子一個と、ちょっとしたセットがあったらいいので、その辺の片隅にでもいいから、始めたらきつとね、もう行列できると思うんですよ。おっしゃったようにめちゃくちゃ面白いので、せっかく映像あるのだから使わないと損ですよなと思いました。

嶋田議長：なるほどです。はい、ありがとうございます。なんか盛り上がってきました。関連でいかがでしょうか。

高島委員：泉大津市は観光都市というイメージは強くありませんが、実は関空までも大阪市内までも電車で 20 分程度とアクセスが非常に良く、ビジネスや旅行の途中で立ち寄る方も一定数いるのではないかと思います。そうした方々や、市民自身がまちのことをもっと知るためにも、図書館が地域や周辺の観光・情報発信の場になると良いのではないかと感じました。近隣の高石市や忠岡町とは広域

連携協定もありますし、たとえば忠岡町の正木美術館には貴重な茶道具のコレクションがあったりと、広げて考えれば地域全体で魅力を発信できる余地があるのではと思います。泉大津市内の観光的なスポットだけでなく、地域のサークル活動や店舗情報なども含めて紹介できると、市民にとっても自分のまちを再発見する機会になるのではないのでしょうか。ただし、図書館の公益性や公平性の観点から、どのような情報を扱うかには配慮が必要です。ですので、例えば図書館の一角に「市民がつくる観光・地域情報コーナー」のようなスペースを設けて、市民自身が発信できるような仕組みにすると、公共性と柔軟性のバランスが取れるのではないかと思います。中学校の地域学習の成果なども、そうした場で紹介されると良いと思います。お店の情報など民間の話題が含まれると情報に多様性が出て、図書館を訪れる楽しさも増すのではないのでしょうか。

嶋田議長：はい、ありがとうございます。2010年代ぐらいに着地型観光が流行りまして、農村に修学旅行に行くとかね、農業の体験をしてみるとか、その頃図書館でも地域の産業とか文化とか、生きている姿をそのままお伝えして感じてもらうというようなことを情報提供できないかということで、みんなの図書館という図書館問題研究会の機関誌で、観光と図書館という特集を2010年12月分に出しました。全国大会の特集で、私も登壇させていただいてまして、大宮昇先生とか、ちょっと観光で有名な先生とかも来ていただいたりしたんです。もう一個だけ情報提供させてほしいんですけど、日本交通公社の観光文化という機関誌があるんですが、2019年10月号に「観光と図書館連携と活用の可能性を改めて考える」という特集があって、猪谷千香さんとお話させていただいたとか、図書館と観光というのを、ポツポツと何かそういう政策的な検討をしている雑誌もあるので、何か参考になればと思って、ちょっとお話しさせていただきました。

岡本委員：とりあえず今までやった中で一番いいのは地図ですね。恩納村ではマップナビという大きな地図を館内に張り出しで、うまく刺さると思うんですけど、要するに公的情報の発信だけになると一気につまんなくなるんです。マップナビは皆さんが好きなことを投稿する、付箋に書いて投稿する感じなんです。すごく面白い。そうすると職員も一村民として書き込める。特に図書館員の方と話

していてみんな困るのは、この辺で美味しいお店って聞かれた時に、公務員の立場からすごく答えづらい。結構、司書の方の技量を問うところがあって、私がよく行くのはっていう回答をされて、結構うまくみんな交わしてると思うんですけど、美味しいものどこですかっていうことを聞かれるのは、大変名誉なことだと思うんですよね。その時に地図のようなインターフェースがあると、うまくワンクッションになりやすく、これは昔、うちが関わっているところに大体どこも必ず入れるんですけど、地図は本当に強いですね。特に泉大津の場合、限られた地域なので、非常にそういう情報発掘のしがいがあるんじゃないですかね。そこにまちライブラリーがここにあるよとか、いろんな情報を集めていくと、一番情報が集まっているよってなる。例えば、南海の駅員さんたちが認識してくれるようになると、ここで聞くより、とりあえずあそこについていう流れが生まれるんじゃないですか。

嶋田議長：大阪市立図書館はデジタルアーカイブでいろいろな古いものも含めて情報発信されてますけれど、ああいうものが観光とか観光資源によって展開というのは何かございませんか。

澤谷委員：それこそ、私たちがやったというよりは、フリーの地図に、なにわ百景っていう 100 枚の大阪の名所が描かれている錦絵があるんですけど、それを今のマップの上に置いていって、ここですよっていうのをやってくれているんです。職員はそういうことが使えるよって言ってアピールをただけなんですけど、続きを他の方が勝手にしてくださったっていう感じなので、そこに好きなお店とか貼っていただけるのかなとかって思いました。北摂アーカイブのような作り方をすると、市民の方々も自分の地図とか、自分の観光情報みたいな感じになるのかなと思っています。今、簡単にそういうものを共有できるので、その代わりにデジタルの情報の取り扱いとか、著作権とか肖像権っていうのはしっかりとお知らせしないといけないし、それこそ図書館の役割かなと思います。もう一個は、観光ってその観光地を巡ってもらうとか、観光に来てもらうのももちろんそうなんですけど、ここにいたいと思ってもらうとかっていうことが、市の税金である住民税などに繋がっていくのかなと思ってしまして。それが外へ向けて投資

をしているというふうに映るのではなくて、巡り巡って、自分たちに帰ってくるというふうに、うまく見せれたらいいなって思いました。

嶋田議長：今のは定住施策みたいなことですか。そこに住み続けたりとか、住みたいとか、ありがとうございます。河瀬さんに聞きたいんですけど、産業観光ってあるじゃないですか、産業の仕組みを先進地へ行って見る。泉大津さんの場合、毛布はすごくシェアの高いってことですが、それは今も結構あったりするんですか。

事務局：詳しく存じ上げないので分からないんですけど、毛布の工場って中に入るの難しいようです。オリアムデジタルヒストリーの中でも3Dで工場の中を見ましようというコンテンツがあります。子供たちが工場見学するときに、事前学習でここここ危険だからここ通りなさいよっていうのを、データ上で見てから行くとおっしゃっていたので、なかなかハードルが高いのかなと思います。

嶋田議長：いろいろと皆さんからご意見いただいておりますけど、他に何か伺えますでしょうか。よろしいでしょうか。ここまでのところで、河瀬館長、今日の議案を振っていただいたところで、こんなことが意見として出るといいなというようなことやこういうこともちょっと聞きたかったんだけどとか。

事務局：私は本当に何か観光のところ、何かないかなと思ってたんですけど、先生方のお口からさほど事例がないということと、一番の気づきは、高島委員に言っていたように、市民からの情報というのが一番欲しいところだなと思いました。何年か前の協議会の時に阿児委員に言っていたと思うんですけど、レンタルサイクルの返却ポイントに、次の観光ポイントの案内をしておけば、そこで返さずに、次のところに行ってみようって人を誘導できるよねっていうお話を言っていたので、外へ意識が向かっていたんです。実はつい最近、九州から来たお客様が図書館に入ってこられて、だんじりを見るのに一番い



い場所はどこですかと聞かれました。泉大津市のだんじりがある日なのに、なかなか答えられない。前月の市政だよりにはルートが載ってたんですけども、月が変わると配布用が図書館になかったので、結局ホームページでそれを見ていただいて、印刷してっていうことになったんですが、ここをご覧ください、ここにだんじりが通りますよ、ここがポイントですよってというのが、市民からの情報としてあれば、間違いのない情報として出せるってというのは、すごく良かったです。

嶋田議長：そのあたりは高橋委員からあった話に期待が膨らみます。

今年度最後の協議会。1月から2月にまた皆さんの日程をお伺いしながらご調整いただくんですけど、河瀬館長の方から何か議案についてご案内ありますでしょうか。

事務局：お願いしたいのが、一つは、「キミと、よみドキッ！」の評価会に協議会をあてることができないかということと、来年度が、キミドキの第2期の策定の年になりますので、こういった動きにしていくのがいいかというご相談をさせていただきたいと思っております。

嶋田議長：皆さん、それぞれ宿題ということで、心づもりをいただければと思います。また、正式な議案が出ましたら、その時にクリアになると思います。

その他に委員のお立場から、図書館についてのご意見とか、ご自由にご発言いただきたいと思います。

高島委員：最近、図書館を利用した際、館内放送で「机に荷物を長時間置いたままにしないでください。安全の観点からお忘れ物として回収することがあります」といったアナウンスが流れていて、とても丁寧で配慮ある言い回しだと感じました。長時間席取りをしてしまう人がいることへの対応だと思うのですが、その注意の仕方がとても優しく、誰も責めずにマナーを伝えていて、とても良い表

現だと思いました。利用者への思いやりが感じられ、こうした細かな工夫もこの図書館の魅力の一つだと感じました。

事務局：本当に心配なんですよ。どこまで安全とっていただけるっていうかわからないんですけれども、お財布とかスマホとか貴重品を置いたまま、離席される場合もあるので、本当に心配で。

嶋田議長：見事な言い換え、それ真実でもあるんですけどね。

岡本委員：子供の読書活動推進計画は、今後も個別計画として子供読書計画を維持するのか、あるいは例えば図書館のサービス計画のようなものと一体化させるのかっていうのは、どうお考えなのかなというのがあります。最近トレンドとして、一体化させるのが基本かなと思っていて、個別計画が多すぎると更新できなくなる。根本的な問題として、子供読書計画を作るだけで良いのかっていう、より本質的な問題がある。つい先日も大臣が発言してて、この界限では何を現実感のないことを言ってるんだという話で盛り上がってましたけど、正直言って今の子供はめちゃくちゃ読書をしている。大人の読書量がただ足りないだけっていう根本的な問題があって、子供読書計画を推進すること以上に、そこをきっかけに大人が読むっていうスタイルをもっときちんとしなないといけないというのは、もう社会的な問題の所在に対する認識はそっちに移行していると思うんですよ。そう考えると、計画を改定するに際して、計画の作り方を変えた方が適切なのではないかな。実際、泉大津はすでにそこまで来ているんじゃないかと思うんですが、お答えになれる範囲でいかがでしょうか。

事務局：先ほどの図書館評価のところでも、数字を出して、目標を出して、達成して終わりじゃなくて、その先に何があるとか、何を目指すかというところを言っていたいたので、サービス計画、この図書館どうしていくのかっていうと

ころがあって、その中にいろんなことが入っているんですよっていう方が消化しやすいかなとすごく思います。

阿児委員：今の「キミと、よみドキッ！」ですごく良かったと思っているのが、計画がほかの部局とか課とかと取り組んでいきますっていうのが見えたんですね。今、岡本委員もおっしゃっていましたように、一体化がトレンドだっているのは、今いろんな計画があって、その見取り図みたいなのが全くない。分かっている人には、これとこれは関連していて、この計画の中にこの計画が位置づけられて、この計画の先にこれがあるんだとか、そういうのは市民の方々は見づらい、見えない。私自身もバーっと言われてもわからない。一体化するとか個別にするとか、いろんな議論があると思うんですけども、関連する計画とか取り組み、泉大津市全体のところでの位置づけ、全体との関連性、見渡せるような位置づけっていうのも合わせていただけると、市民の方々にもこれは全体のなかでここを言っているんだねとか、これとこれは近い計画なんだ、立体的に歩むんだね、とかっていうのが見える形になる。寄り添うものとして見取り図のようなものがあった方がいいんじゃないかなと思っているところです。

嶋田議長：この件については、いろいろな意見を耳にするんですけど、2つありまして、岡本委員のおっしゃっていただいたように、子供読書活動推進法は環境づくりなので、大人がやるのが主なんですよ。サービス計画とか基本計画で、子供たちにどういったサービスをするかというときに、環境としての図書館の取り組みですとか、法的にはその住民ですね、その市民にも一定の大人としての責任ということを描いていますので、その中で、整理をつければいいじゃないかという重複する部分もある。一方で、子供読書活動推進計画の理念というのが2条にありますけれども、理念とか法の趣旨というのが、全体計画の中に盛り込まれることによって、見えにくくなるのではないかと。そういう趣旨が少し弱まる、後退するので別にした方がいいという考えも聞いたりするんですね。私はどっちかというと、どう効果を出すかっていう時に、施策的な分かりやすさでいうと、まとめてしまった方がいいと思うんですけど、その見せ方ですよ。基本計画の中で、子供の活動推進計画などもいかに際立たせて、環境づくりというところ

ろでうまく見せるか。そういう工夫をすれば、必ずしも独立したものでなくてもいいと感じているというのは、私の個人的な意見です。両方の課題について、泉大津として計画を作っていくとき、一つのチャレンジだと思うので、今後、議論の流れの中で何かお答えいただければと思います。

事務局：この子供の読書活動推進計画の中で、漫画のところですけど、疑問を持って調べて分かって、それをアウトプットするっていう形の知のサイクルっていうのをここで命名していただきましたけれども、これって子供だけに当てはまることではなくて、大人もそういう視点を持ってないと、いい街にはならないかなとすごく思います。実は今日、高橋校長においでいただくのが2回目なんですけれども、調べる学習コンクール第3回目の表彰式をお昼からここでやりました。(スクリーンを見ながら)これが小学生の部の市長賞を取った「みんなでやろう SDGs」で、万博に行ってSDGsっていうことを意識した。それまではゴミ拾いと言っても、ただゴミ拾いをするとかしか思ってなかったけども、万博に行ったことで、それがSDGsにつながるんだっていうことが分かったからって、もっと調べようと進めてくださったんですね。大人の部の市長賞「未来に残したい駄菓子屋再生計画」、駄菓子屋さんって最近ないよねっていう疑問から、じゃあ周辺の地域はどうなんだろうってインタビューに駆け回られて、それをまとめてくださいました。小学生の教育長賞「ホタルイカは炭を吐くのか」は、大好きなものをもっと調べたいと思う気持ちがあふれている作品です。「好き嫌いの不思議」この子はマヨネーズが嫌いだけど、みんなマヨネーズ好きっていう。なんで僕だけ嫌いなんだろうという疑問から熱心に調べてくれたりとかですね。コンクールに出して表彰して終わりではなくて、その後、表彰式場で発表してくれたんですけど、自分はこう思ったから調べようと思いましたとか、発表が難しい方には私からインタビューをして、どういうところを工夫しましたかとか、そしたら字を大きくして見やすくしましたとか色を変えてみましたとかいろいろ言ってくれました。最後に最近疑問に思ったことはなんですかと聞くと、次の疑問はこれなんだと子供たちが言ってくれていて、それを一年間かけて調べるとまた発表できるねっていうようなインタビューにしたんですが、これって子供だけじゃなくて大人もそうだな、だから読書活動推進計画って、子供だけじゃないっていうのは、今日まさに思ったところです。

嶋田議長：ありがとうございました。では事務局の方にお返しいたします。

事務局：議長、ありがとうございました。以上をもちまして、令和7年度第2回泉大津市立図書館協議会を終了いたします。委員の皆様、ありがとうございました。